



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

51

小泉とし夫

■牡丹江への行進

ハルビンと牡丹江までの距離は浜綏線（ハルビン・綏芬河）で約三百五十キロ、東京・仙台間にひとしい距離だから列車で半日もかかることはない。しかし徒歩となれば、道は山や川をう回して屈曲するので二十日もかかると言います。

ひたすら鉄道線路の上を歩かせられ夜半に三木果樹という駅まで来ると、構内に屋根のない貨物列車が待機していて乗車することになった。

九月の北滿では昼に三〇度でも夜間には零下にもなるので、雨に肌着までぬらした昭夫たちは、ホームに積んであった米や大豆の大麻袋をもちだし毛布代わりに身につけました。

貨車は走っては止まり、止まっては走るという走行で、停車するたびに下車して用便をたした。捕虜の食事は馬のえさのようなコウリヤン、玉蜀黍（トウモロコシ）、粟などが一日二食与えられたが、煮炊きできず生のまま支給されたので

下痢を起こす者が続出した。

五日ほどして牙不力という駅に着くと、捕虜たちは貨車から下ろされてまた枕木を踏む徒步行進となりました。

隊列の前後左右には引率と監視役のソ連兵が付添い、疲れて遅れそうになる捕虜には、肩にかけたマンダリン銃で尻をこづき「ダワイ、ダワイ（急げ、急げ）」と号令した。夜には鉄道沿線の山林での野宿だった。

くたくたに疲れた昭夫は熟睡してしまつたが、翌朝になると山林のあちこちに日本軍の死体が転がっていた。腐臭がただよう無残な光景に昭夫は息をのみ合掌しました。山林ばかりでなく道端や線路の側にも死体はあった。おそらく牡丹江からハルビンをめざすソ連機甲師団を阻止して玉砕した兵士たちの死骸だったのです。

そんな悲惨な激戦地の跡を何度もくぐり、やっと牡丹江駅構内にたどり着いたのは、ハルビンを出発してすでに二週間近くも過ぎた九月中旬でした。

犬

犬よ

お前は荒れた魂のために死ぬのだ
荒れた孤独な世界の魂のために死ぬのだ

愛もじようぜつもなく

恐怖や飢餓の光もとどかない世界の奈落の底で
淋しい狼が吠えている

淋しい狼が

今日もはて知れなく吠えている

犬よ

お前はその狼よりも

もっと淋しい世界の魂のために

死ぬのだ



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

52

小泉とし夫

■日本人捕虜収容所

昭夫たちの隊列は市内の中心地を過ぎ、街の東南を流れる牡丹江川のはとりに出ると、そこには木造バラック造りの捕虜収容所があった。「牡丹江第七日本人捕虜収容所」と太い文字で書かれていました。

マンドリン銃を肩にしたソ連兵たちが立ち並ぶ前を、一列縦隊にさせられ収容所の門をくぐりました。

各地区で「男狩り」された

日本人捕虜の隊列も続々と牡丹江に到着し、それぞれの収容所に吸いこまれていきます。

これらの収容所は、もともと軍人捕虜のためのものだったから、階級章をとられた将校の姿もみられ、捕虜になってもなお兵士や民間人を見くدす風だった。昭夫が行進中に耳にしたうわさは、牡丹江からウラ

ジオ経由で日本内地に帰国できそうな観測でした。しかし収容所に来てみると、そんな幻想はくだかれ、牡丹江は捕虜たちをシベリアに送還する輸送基地であることが明らかになったのです。

収容所は三重の鉄条網で囲われ、四隅には火の見やぐらのような監視台があって銃を持った兵士が四方を見張っており、脱走しようとし射殺された幾つかの実例を聞かされた。昭夫の収容されたバラックは、長さ五十呎、幅十呎の建物で中は三段ベッドが置かれ、捕虜たちはぎっしり押し込まれたが、今までのように風雨にさらされ野宿することもないので、昭夫も久し振りで手足を伸ばして横になりました。

捕虜たちの日常は、伐木、鉄道作業、道路敷設、荷役、土木建築や農作業、雑役などが課せられたが、尻の肉をつねって体力を判定し第一級（重労働）、第二級（軽労働）、第三級（作業免除）に分類して業割りされたという。昭夫の尻は瘦せていたらしく第二級と判定され雑役にまわされました。

十月に入ったころ、捕虜たちは百人単位で収容所から連れ出され、いよいよシベリア送還が始まったのです。

ひき蛙

お母さん

もし私が醜怪なひき蛙だったなら
あなたならどうしますか

おお 恋人ならば

たちまち目をまわしてしまっ
燃えるように見つめてくれた目を
恐怖とにくしみにかえて
千里も速くに去ってしまう

もしもまた妻ならば

子を残して家に帰ってしまっ
なぜかという

その子も私と同じひき蛙なのだから

でもお母さん

あなたならどうします
私がひき蛙だったなら
ひき蛙よりも

もっとみにくいきものだったなら
きりわれるまむしだったなら
つられたあんころのぶぎまだったなら
もしもあなたに

それらが私であることを告げたなら

（詩集「動物哀歌」から）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

53

小泉とし夫

■民間人捕虜の解放

収容所の捕虜たちのなかには日本への帰還と勘違いして喜んで列車に乗った者もいた。しかし、列車は牡丹江駅から一路シベリアに向かっていたのです。こうして送還される捕虜列車が何日もつづき、いずれは昭夫も乗車させられてシベリア送りになるものと覚悟していました。

ところが十月七日になつ

て、思いがけなく民間人捕虜は解放するという指令が出されたのです。昭夫はこれでシベリアには行かずに済むと胸をなでおろしたが、同時に前途に対する不安が錯綜していました。

解放されてどこにでも勝手に行けといわれても、微々たる退職金もほとんど底をつき、垢あかとはろの衣類をまとう昭夫には、これから酷寒に向かう満洲

の冬をどのように過ごしたらよいか途方に暮れる思いでした。

解放された二千人もの民間人はグループをつくってハルビンに向かう様子なので、昭夫もその仲間に加わりました。ハルビンから牡丹江まで行進したあの気の遠くなる三百五十キロの長い行程を、こんどは逆コースをとってたどるのです。

空腹と疲労の重なる体力では一日十六キロ歩くのがやっとで、途中で中国人の農家で食料を分けてもらい、野宿を重ねながら二十日余も歩きつづけ、ようやくハルビンにたどり着いたときには、すでに十一月になっていました。

グループの仲間は、それぞれ家族の待つ難民避難所に向かったが、昭夫のように行き場のない者は「ハルビン日本難民会」（旧近藤日本難民会）が世話をする有料収容所に身を寄せるほかはなかった。

二、三日して長旅の疲れもとれたので、昭夫は生活費を得るために中国人の人足として苦力的な労働に従事したが、きつい仕事のわりに労賃は安く、とても長続きできそうにはなかった。このままハルビンにとどまればきつと体をこわしてしまつ、新京（長春）ならば首都でもあり、もっと楽な仕事にありつくのではないか、という考えに傾斜していったのです。

ひとつのある所

ひとつのある所までおりてゆへう
そこから地獄の火が見えるはずだ
ゆれる破船の尾灯のように
かすかに見えるはずだ

ひとつのある所まで
九十九億の階段があるのだらう
そこから地獄
更に九十九億の
かたい階段があるのだらう

百段目から
周囲が古びた森林のように
暗くなるはずだ
千段目から
すべての目がうしなわれかけるように
見えるものがなくなるはずだ

ひとつのある所まで
九十九億の階段をおりてゆへう
ひとつではそこに
ひとつでなければならぬもののように
待っているはずだ

ひとつのある所から
九十九億の階段をおりてゆへう

（詩集「動物哀歌」より）

「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像



54

小泉とし夫

■街頭でたばこ売り

新京には昭夫の同級生であった山内、古館両君が九月ごろより北安から移住していたのです。北安省から避難してきた邦人たちとともに白菊小学校に収容されていきました。児玉公園と関東軍司令部の南側にあり、日満軍人会館に隣接した小学校でした。山内、古館はこの小学校を根城として仕事をしに市内に出歩いていたのです。

十一月半ばごろ、山内が仕事のため市内を歩いていると、街で昭夫とばったり出会いました。昭夫は路上でたばこ売りをしていたのです。

山内が「やあ久しぶりだね、元気かい」と声をかけると、昭夫は笑顔で「変わりないよ」と返事をしたのでした。

山内は仕事に向かう途中だったから、詳しい情報は再会時にたずねようと別れてしまったが、昭夫がどこの収容所に居るのか聞かずにしまった。しかし、山内が昭夫を見かけたのはこのときだけでした。

ハルビンより新京に来たものの、昭夫には半年前に新採用職員の現地訓練で約一か月滞在した時の記憶しかなかった。

駅前のロータリーからヤマトホテルを過ぎて吉野町の商店通りに出ると、日本人街だった名残のスズラン燈も残っていた。道路の両脇には餃子、栗餅や古着などの露店がずらっと並び、薄汚れた身なりの人たちが商いをしていた。各地から避難してきた居留民たちが生きぬくためにしがみついている姿だった。

空腹をおぼえた昭夫は粟餅の露店に立ち寄ると、事情を察知した店主は、日本人居留民会をたずねるようすすめて、地図を書いてくれました。

居留民会は興仁大路に面した白いビル内であって、避難民であふれていた。受け付けで事情を話すと、当座の食料として三合の米が支給され、居住には近くにある順天小学校を紹介してくれました。

収容所の暮らしにもなれると、先住の避難民が街頭でたばこ売りをしていることを知って、昭夫もたばこ売りをするようになったのです。昭夫が山内と出会ったのは、それから間もないころでした。

(毎週木曜日掲載)

巨象ザンバ

ザンバという巨象がいた
ほくはその象の話なら度々聞いている
それは昔からザンバと呼ばれる象で
澄んだ夜空のように青黒い肌と
半月のように冷たい牙を持っていて
ひとりの仲間もなく
さまよって歩いている象なのだ

ザンバという名の巨象はたしかにいた
ほくはその象の遠吠えなら度々聞いている
それが嘘ではない証拠に
そいつはタンガニカの高原や沼地の中を
あるいはガンジスの上流の森林や
ゴビの砂漠の砂塵のなかを

実に恐ろしい巨体で
どしどしりと歩いているのだ

ザンバの年令は幾百才と言ったか
幾千才と言ったか忘れてしまっ
なにしろほくの生れる以前からの話だから

幾才と言ったらいいか分らない

だが巨象ザンバの名を聞くたびに
ほくは宇宙の半分を聞いてしまった気がして
度々泣いてしまうのだ

ザンバの肌はあまりにも青黒い空のようで
ザンバの牙はあまりにも冷めたたくて
ザンバの耳や鼻なり
あまりにも寂寥の象らしいから

巨象ザンバはたしかにいたのだ
ほくはその象の足跡なら度々見ている
その象の足跡は
覗けない大地の井戸のほど深々しいから
ほくはひと目見ただけで分るのだ
そしてほくはザンバの話なら
小さい子になら何時でもできるのだ

巨象ザンバはたしかにいた
ほくはその象の永劫の遠吠えを
度々聞いているのだと

(詩集「動物哀歌」から)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

55

小泉とし夫

■競馬場は死人の山

朝から夕方までたばこを売り歩いても、たった一食分の収入にしかならなかった。そのうえ路上の売人は、

日本人狩りに遭つ恐れもありました。夕夕で使役させるため満人によって日本人男性を拉致（らち）するのです。そこで昭夫は十一月いっぱいではばこ売りから手を引きました。

たまたま、収容所の独身者に用心棒の口があつて昭夫はそれに応じました。シベリアに連行された首都警

察高官の官舎で夫人と女中だけの家庭でした。住み込みで食事と若干の小遣いが支給されるというのです。

収容所ではアンペラとよぶゴザのような敷き物に縮こまって寝起きしていたから、柔らかな寢床に手足を伸ばして眠るのは久々に味わつた法悦でした。しかし二カ月目で解約され、また収容所に戻りました。留守家族のお金が続かなかつたのです。

収容所では十二月ごろより発疹チフスが流行し、米

養失調のうえ寒さと下痢と高熱のために死人が続出していました。死者は夜に戸外に置くと、翌朝にはカチンカチンに凍りつき、それを荷馬車に積めるだけ積んで墓地の穴に投げ込みました。

墓地は郊外にある競馬場で、穴自体は冬になる前に掘られていたが、凍土のため覆土できないので四、四方もあつた競馬場の至る所に、死者の雪山が築かれていました。

そのうちに、昭夫は満人街で食料や薬劑を安く仕入れ、日本人の店に利ざやをとつて納品する御用聞きも覚えしました。チャンチュウ（支那酒）は利益が大きく、一升を二十四で仕入れ小売店には倍以上にも卸すことができたのです。

収容所の仲間のすすめで日本人の作業場で砂糖製造の手伝いもしました。満人より砂糖大根を仕入れそれを煮詰め、ペクチン酸で結晶させるのです。その仕事もポプラが芽を吹くころには終わってしまいました。

地底の死体

深い地底に死体がうまつてあつて地上へ出たいと言つて泣いている

深い地底の死体は

巨大な氷河に落込んだハ虫類かも知れない
あるいは高層ビルの屋上から

一瞬にして消えた現代人かも知れない

深い地底がある以上

其処に身動きならぬ死体がきつとある
そして地中が重い重いと

地上へ出たいと泣いている声が
夜毎聞えるのだ

（詩集「動物哀歌」から）

（毎週木曜日掲載）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

50

小泉とし夫

■新京の八路兵士

昭夫が弟さんに「満洲では、生きるためなんでもしたが、泥棒と人殺しはしなかった。八路軍の荷物かつきもしたんだよ」と、よく語っていたという。

その八路軍（新四軍・中国人民解放軍とも呼ぶ中共軍）が国府軍（国民政府軍）を追放して新京に入城したのは、二十一年四月半のことです。日本人たちは八路軍を「パード」とよんでおりました。

芝居をする猿に寄せて

猿のなかを
いま嵐が渡っているのだ

猿のなかを
いま乾風が吹き始めているのだ

猿の際限は
はかり知れないほど広いのだから
猿のなかを嵐が渡ってゆくのに
五十億年はかかるだろう

猿の奥底は
深さ知れないほど深いのだから
猿のなかで乾風が吹きやむまでに
それから五十億年はかかるだろう

猿のなかを
暗い嵐が渡っているのだ

猿のなかを
あの吹きやまぬ乾風が
いま吹き始めているのだ

（詩集「動物哀歌」から）

中ソ友好同盟条約により、国府政府は二十年十二月に新六軍二千と保安隊二千を新京に空輸して駐屯していました。ソ連軍が四月十四日に新京から撤退すると、新京を包囲していた八路軍は市の南北から侵攻し、十九日までの激しい市街戦によって国府軍を制圧したのです。

入城してきた八路軍は濃い緑の木綿服を着て、布靴をはく者、ポロ服にわらじ、麻袋を背負っている者、天

びん棒で大風呂敷包みを担っている者もありました。将校も兵士も同じ服装をし、肩章もなければ、腕章もなく、ピストルも軍刀ももたなかったが腰には手りゅう弾をたくさんぶら下げていました。

彼らは入城の夜、大きな鍋で高粱（こうりゃん）の雑炊を炊いて質素な祝宴をしたという。彼らは礼儀正しく、謙虚で、傲慢な振る舞いがなく、ソ連兵士のように略奪や婦女子に暴行するといつうわさはまったく聞かえてきませんでした。

日本人の宿舎に分宿するにも「夜寝るだけです。一部屋だけ貸してください」と頼んで歩き、泊まりにくる兵士たちは整然と寝て整然と起き、「茶わん一つなくなっても届けてください。わたしたちの軍隊に悪者がいたら恥だから」とことわりました。

しかし八路軍の新京支配も長くは続かなかった。強大な国府軍が奉天から北上し新京に迫ってきたので四平街で阻止するために、日本人居留民会に弾丸運びの使役を要請してきたのです。独身で若い者が選ばれることになり、国共両軍の決戦場である四平街まで、昭夫も弾丸運びの手伝いをしたのです。

（毎週木曜日掲載）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

57

小泉とし夫

■ボロ服を着た兵士

五月二十日、四平街をめぐる攻防は国府軍が勝利して、新京の八路軍は撤退するだろうとささやかれました。日本人たちは居住区周辺でまた激しい交戦が行われるのではないかと新たな恐怖に襲われました。

八路軍は「われわれが新一軍（国府軍）と戦うことによって、市民に多大の犠牲と損害を与えることにな

るので、われわれは整然と撤退する。しかし、必ず近い将来に、再び進駐する」という意味の布告文を張り出し、五月二十四日未明、戦わずしてまるで忍者のよう

に整然と撤収して行きました。

たった一カ月余のことでしたが、八路軍の進駐から撤退までのやりかたをつぶさに見聞した昭夫は、これまで接した関東軍やソ連軍

スクリュウという蛇

ほんとうに見た結果言つのかスクリュウという蛇のことを

錦蛇など問題ではない世界にスクリュウという蛇がいるとほくは正面切つて言いたいのに

スクリュウという蛇がいるそのためにほくはマット・グロツクが無性に恋しいのだ

マット・グロツクから大湿原に吸われてゆくアロヨ・トルカーサというアマゾン支流の名が忘れられないのだ

錦蛇が蛇の限界なら
ほくの見る宇宙の深遠な夢も限界だ
スクリュウという蛇が
ただの言い伝えに過ぎないのなら
ほくの尋ねるもっとも果て知れぬ神も
それまでだ

だからほんとうに見たのかと聞いている
マット・グロツクの昼なお暗い湿原を
密かに渡ってゆく四十メートルの水蛇を
必死になって周囲をまぎる首の子のよう
聞いているのだ

（詩集「動物愛歌」から）

や国府軍にはみられなかった清潔な兵士たちを知ったのです。

毛沢東という人はじつに偉大な人だ。民衆に迷惑をかけてはいけない、いたずらに戦禍にまきこむなどという思想が息づく、そんな兵士たちに感動しました。昭夫は八路兵士からうけた衝動をずっと胸にしまっていました。

詩稿ノート『荒野とポップ』の「兄弟」という六連三十六行の詩篇は、ボロ服を着て新京に入城してきた八路兵士たちの姿がイメーシされています。

元気でお国に帰られるよう
う
向（こう）に見える山はもう
蔀（ひ）（匪）の軍です
でも悪いようにはしない
でしょう

兄弟なのですから
私達も戦いたくありません
兄弟なのですから
兄弟なのですから
このほろきれのような
恰好の何処からこのよ
うな言葉が出るのだ
（第三連）

胸に永くこびりついていた
思いを、やっと吐きだした
ような作品ですが、第二
連の「一九四五年秋」は、
「一九四六年春」のことが
デフォルメされているので
しょう。

（毎週木曜日掲載）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

58

小泉とし夫

■新聞に帰国情報

五月二十四日の朝、新京の街には一夜にして八路軍の姿は見受けられなくなりました。予告どおりに国府軍と戦うことなく撤退していった八路軍に、さすががしさを感しながらひそかに安堵しました。

昭夫は中国人同士が殺しあう内戦に心を痛めていたし、居住区の日本人たちが市街戦に巻き込まれずに済んだのです。

その日の午後四時ごろに国府軍が新京に入城してきました。兵士たちの服装は、

鳥追い

安寿恋しやほつやれば
厨子王恋しやほつやれば

一本の細い竹竿の先端に
雀が一羽死んでいる

安寿恋しやほつやれば
厨子王恋しやほつやれば

行ってしまった人質の船は
今頃何処を走っていることだろう

竹竿は遠く静かにゆらぎ
億万年の秘宝はゆらぎ
そんな宇宙がかすかにある

ぼろぼろの八路兵士とは相違して米軍の支給らしいハイカラな軍服でした。アメリカ製の自動小銃を携え隊長がジープに乗って入城する姿に、今回の戦況好転の背景には米軍の支援があったことを強く印象づけられました。

町中に「打倒共匪」のピラが張られ、日本人居留民会は日本人の家々に「歓迎中央軍」というピラを張るよう隣組に通達してきました。八路軍発行人の東北流通券はたちまち半額以下になり、国府軍兵士が手にする

法幣が満洲国旧紙幣と同額で流通しました。

国府軍が入って二日ほどたつと、血なまぐさいうわさが広まってきました。国共内戦の巻き添えを朝鮮人やロシア人がかぶったのです。八路軍に協力的だったとして朝鮮人の居住区が国府軍に襲撃され、多数の朝鮮人が殺害、略奪をつけました。また満鉄の長屋住宅に住むロシア人家族が襲われ、十八歳の娘が暴行された包丁でノドをつき自殺したのです。国府軍兵士にいきなり拳銃で顔を殴られた日本人のうわさもありません。

まもなく日本字新聞が二、三紙発行され、マッカーサー総司令部の施政や日本国内のニュースなどと同時に、日本人の引き揚げに関する情報も載るようになってきました。

いままではつわさだけ流れていましたが、新聞には帰国を扱った中国側の役所の動きが具体的に報道されていたので、厳しかった満洲の冬もやっと終わるのだと昭夫は思ったのでした。

(毎週木曜日掲載)

(詩集「動物哀歌」から)



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

59

小泉とし夫

■ポロ市のにぎわい

街路樹の白樺に新緑がきらめくころ、日本人の遺送事務を扱う役所が奉天に設けられ日僑管理総処と称した。新京には、その出先機関である長春市日僑管理処ができたのです。

「日僑」とは中国に在住する日本人のこと、「倅」とは「とりこにした人」で捕虜と同じ意味です。日本

人居留民会の名称も「長春市日僑善後連絡処」に変わりました。

六月のある日、新聞に「七月八日に長春地区の遺送が始まる。遺送の順序は長春市内の南の端から隣組単位」という記事が載り、携行物については「一人リユック一個、所持金は一人現金千円、万一貴金属を所持しておれば、全員乗船ス

トップで使役に服さねばならぬ」と、奉天（瀋陽）地区での例を引き厳重な注意を喚起していました。

これらの報道で、本当に内地に帰れると分かり、居留民たちは食いつなぐための商売や使役稼ぎを止め、引き揚げの準備にとりかかりました。携行物は一人リユック一個ということで、家具、什器や衣類の処分が行われました。

都会のなかを
荷をひいた牛が歩いてゆく
都会のなかを
牛の歩くのが許されるものだろうか
都会のなかは
舗装された道路が美しく続いていて
大型のバスや高級なハイヤーや
新しい流行の服を着た
都会人が歩くものなのだ
それなのに荷をひいた牛などが歩いて
いいものだろうか

都会のなかを

牛が歩いてもいいという
法律があってもいいものだろうか

それはまだ

牛のやってくる草原があり
その草原が見極めえなかつた夢のように
背後にあるともいっただろうか

それはまた

牛の入ってゆく河があり
その河が見果てえない壮嚴な瀧のように
宇宙へかかっているともいっただろうか

（詩集「動物哀歌」から）

なかでも衣類は中国人のポロニーヤがリヤカーにカゴをのせて買い出しにきたが、持ち逃げ、けんかななどのトラブルが生じたので、警察は順天地区の国務院の東側にポロ取り引きの公認市場を開設しました。この露店市場には朝五時から、何百人もの日本人たちが派手な友禅模様の着物、じゅばんから紋付き、モニーングコートなどを肩にかけ、人込みの中を歩きながら買い手待つのです。

持って帰れる現金は一人千円だけだから、処分した宝石類と余分なお金は贅沢な酒食に消費するので料理店や酒店がたいへん繁盛したと言います。なかには引き揚げ途中の食料品を手堅く仕入れ、それを仲間内に売り歩いた人もいました。いずれにしろ昭夫は独り身で蓄財もなかったから、現金も携行物も改めて処分する気遣いがなかったのです。

（毎週木曜日掲載）



「動物哀歌」の詩人

村上昭夫の肖像

60

小泉とし夫

■帰国第一陣の出発

日本人の遣送はまず五月中旬に奉天周辺から始まり鉄嶺地区につき、七月上旬にやっと新京地区の引き揚げが開始されました。

当時の新京には約二十万人の居留邦人がおり、それを約二千五百人単位で輸送することとなりました。約千五百人で団（大隊）が結成され、居住区の隣組の人たちを主体にして約四十人で小隊を組み、中隊・大隊に組織されました。そして市内の南の端から引き揚げが開始されまし

た。都市計画によつて新京特別市の南部には緑園・承德・春光などの高級住宅地区があり、また政府代用官舎や大企業の社宅が軒を連ねる区画でもありました。

七月八日の昼ごろ、長春市引揚げ第一陣となったこの区画の家族二千五百人は、南新京駅前に集合しました。駅前にはアンペラで囲う臨時の収容所がつくられ、一団の乗客が待機していました。みんな帰国のため的小こさっぱりした身なりで、荷物は三十キに制限されていたので、手製の大

きな麻袋リュックを背負い、なにやら旅行にでかけるような明るい雰囲気でした。

この第一陣の見送人や、この光景を一目見ようとかけつけた人たちが、ホームの後ろ手にある土手に人垣をつくっておりました。昭夫もそのなかに混じっていました。見送る人も見物人もみな、いずれは順番が自分にもくるといふ期待感で一部始終を見守っていたのです。

通常は〈南駅〉とよんでいた南新京駅ホームに、約三十輛連結の貨車が横づけされました。かつて戦車や自動車などを積んでいたとみられる無蓋の台だけの貨車なのです。台車の囲いに丸太と板で側板を作り、石炭積み貨車のようにしてから小隊ごとに乗車し、板枠に荷物を積み、まんなかに八十人ほどがすし詰めに座りました。

ポーと汽笛が鳴り、ごとんと列車は揺れ、貨車から貨車にガチャガチャと軋（きし）る音がひびき、午後二時三十分に出発していきました。

鳥 追 い

安寿恋しやほつやれば
厨子王恋しやほつやれば

一本の細い竹竿の先端に
雀が一羽死んでいる

安寿恋しやほつやれば
厨子王恋しやほつやれば

行ってしまった人買の船は
今頃何処を走っていることだろう

竹竿は遠く静かにゆらぎ
億万年の秘法はゆらぎ
そんな宇宙がかすかにある

（詩集「動物哀歌」から）

（毎週木曜日掲載）